



1303
10

物語後編

梅之子翼齋

梅花春水卷之四

東都

南仙笑楚滿人編述

止爭語貞操

正義

清

草拾七齋

虎と見て石ふ立矢の念力岩をすこぶらき渡のどく。俱不裁天の仇を
ぬらへ孝子後ま。本懐を達せどとりゆづる。猪も龍次郎三田兵
衛少ハ年來の仇くる蓑文太をあわる真うす。死せりともひる
長言きく蓑生せつうが故ゆづ大方ゆくす。禪院が深き清を感佩
しき。一剎すちやく。飯國まご。宇四瀬支源。秀袖。祭主
等は。奥。さき。源。秀ひ。行公。人々の志のやどを。破。あげとりゆよ。宇四瀬
は。源次郎よむ。ひ私。是まで町入ふ。五斗米。腰を。からず耕

を驚ひ戻て着る市中隱者。圓前のあらまびと、金剛のまとみ
望してすとりのよ頃。年も同じく。小子とも老翁。一才の何をう
願見る袖外。まへ初め。うり町人百姓を囁ひ。唐琴の屋敷へ。まきはせ
者の度あるまび。おりづきでも不便を加へ。四百はひ下さぐ。妹由美
り。まく里存余てあくべ。歛塔をとて。老の樂とまぐきのまど。じゆくまく
亡人の數よりまへ。仍卒。少海どり。お長をとの世よりをとおひ。よ
再縁坐せし。うへ我子す。若ひ老のかと。うへて。猶ひ。猶原らのよ
安どけ。うへて。うへて。うへて。うへて。うへて。うへて。うへて。
長青。蘿生。うへて。昔の長言ふやく。父もゆく母もゆく。流風
まきが流ま湯拾ひ。まきが養子となるすぐ。袖外。まへ入る。うへて。

跡忠勤をげ。うへて。我ハと。まへ立別。尚も諸国よ湯を。む。謝美
運ふ微ひ。べて。と。飄然と。えり。を。替へと止し。の。游次郎。木。四。湯
支拂ふ。絹も彼も。は。國とも。の。く。知行け。斯く。游次郎ハ袖外。鶴
ひ。猿の仕度。との。二種の宝を。大切。小守り。本貫さて。登りけ。去
程ふ往く。て。要撫のとき。こ。まけ。じ。袖外ハ。鶴次郎。よ。向ひ。夕の達。農
ハ。何。柔さ。さ。ぐ。の。真。よ。海。む。度。う。ハ。取。く。返。て。持。ま。う。べ。と。この。内。音。ハ
徐。う。ふ。引。び。き。あ。の。ご。陸。か。と。あ。だ。我。ふ。進。ば。べ。と。袖外。又。別。且。只。獨
た。ど。る。後。の。方。う。も。猿。商。を。あ。き。る。と。あ。へ。く。此。の。荷。を。脊。負。ひ。う
壯。佼。哺。く。或。家。さ。み。み。ほ。方。う。何。方。へ。通。り。す。や。見。ま。う。く。ま。う。が

赤面の前輩さきぢゃ。後輩あらわい。奈何なほの子細こざい。と別べつく
間まよ織次郎おりつら。もりやと。小子おぶ。余あまの旅たびが好すきこの。
かかた呼用よ。下総しもふさ。武藏むさの間まを編整ひんせい。一枚まいの方ほうへ立たてく。は等とう
ききと物語ばなし。彼かれの旅商りょしょう。そもん。堂どうへ便びん。旅たび道みち
其その情じょうう波なみ。波なみ。暫とき。が宿しゆく。同とも一いっ。ちづづ。小子おぶ。宿害しゆがい
あくまで。是ぜ眼まなこ。がる。まうざる。まうあり。四よ方ほう八は方ほうの物もの。
あつ。被はの旅商りょしょう。腰こし。腰こし。相あい。奈な何な。や。阿房あはう。
取り。少すくな。少すくな。付つ。煙草えんとう。宿しゆく。壯校じょうこう。ふ。相あい。奈な何な。や。阿房あはう。
六ろくや。少すくな。互たが。少すくな。互たが。少すくな。互たが。見み。
て。次郎つら。我わ。煙草えんとう。供うなぎ。者もの。火石ひせき。具ぐ。齋さい。たれ。

最さい前ぜん。う。呑の。元もと。こ。居ゐ。う。と。同とも。一いっ。腰こし。烟管えんপান。取う。一いっ。吹ふき
せ。う。猪いの。も。今いまの。篠籠しののめ。さ。の。ど。く。覺お。う。さ。と。又。般はん。の。う。あ。つ。
不ふ。圖ず。彼かれの。旅商りょしょう。持も。煙草えんとう。入い。を。見み。何なと。から。と。見み。あ。う。な
き。が。商しょう。入い。よ。じ。ひ。卒そく。余あま。里下さと。持も。煙草えんとう。入い。と。我わ。よ。見み。
ど。り。よ。最さい。易やす。た。ま。と。游ゆ。次郎つら。よ。渡わた。せ。が。游ゆ。次郎つら。ひ。よ。と。と。見み。
ふ。李り。白しら。鶴つる。を。り。す。笠かさ。と。形かたち。不ふ。日質ひしつ。を。金揚かなあげ。す。と。ま。う。ふ。ざ。も。あ
ら。ぬ。我わ。持料じりょう。の。皮は。二に度ど。齋さい。よ。旅商りょしょう。と。見み。遊ゆ。次郎つら。ハ。
旅入りょりゅう。不ふ。審しん。氣き。よ。そ。の。煙草えんとう。入い。が。何なと。せ。ー。と。と。見み。と。游ゆ。次郎つら。ハ。
り。と。よ。何なと。も。せ。ー。と。せ。ー。と。と。見み。と。游ゆ。次郎つら。ハ。

答ふるは旅入の氣をくへば思ふる國の心よ他うやとあへ
きて因ふよさきバ山子秘藏せしふよく便ひきだ。似ひてとやせ
が奈何せよと口みたり。どひの裏か。諸川道奴名中の松原の堀
みて簡よや總みて我所持のふを盗み取つてゐるやう。されど
こそりと別く妄物の言ひを食と呑ひても。そもふくらひ當つて
どひ中よ油ぬせ。おうて栗榜の闇所よひにまが。庶民の郎ハ開守ニ
向ひ唐琴テ游次郎とや者よりと名無ひて通る。彼の旅宿も同く
姓名をうづりお遍り。中田の駅を越へ古賀の松原へさてから時き
かの旅人歸次郎よむ。身のまゝ我煙草へよ見へあくやと
因ふきよとゆめととなり。奈何よすよびくへひた所持の品。

下總佑倉の連旅かく。盜まれかくとあひて。承。ナラアシナリ
貴属が持居らるゆゑ降み一ヶ何とうせーと是が是が旅人も侍と
カガモト。左もとをあくめ七一匁も佑倉の並木の松原上刈結屋
跡市と殺一三百両を奪ひと。恐れとくまへ立考と。その盜穢ハ美
少年ふく名ハ體とやらしゆかのと。毎年我父室宿う千本盆佐
清といふ者の方より詫ふ告げにて。敵の殲難と還つて西ハ則
は煙草入跡市グ蔵の延三郎。波よ達んと国を立退き諸国をさびす
今日口今。敵よめぐり遙ふく。敵へせどと一腰の柄よまと爲け
ドホキ。一矢を射。身をすみ揚負へくと結よす。龍次郎ハちまくかう。ヨリひもく
必衝示志す。とぞうりかく。金魚が行まつてみよまつて。下總



佐倉の千本屋作彦房とおり。延長より退職せし折柄我よむすく進
出まうへ上別の絹商人は市どめとせらん今一箇ハ退職モトト巻波
世の鷺浦鬼平次延市どめふれあ干の金子を音ようけまく故郷へ
飯もす日ハ吾脅がまへひと同日延市どめハ船もすてたま宿を
たゞく行まて跡我ホミ従引續て佐倉を立出船原へさへ無づか。
何者かや打燈めがけく礎をうちふ。ありハ漬くそもの箇物く二
箇ハまこと食ふと遡まく最前の礎ハ世の天狗床とする事
化の序あるふくあくびらと語つて食ひく是を刀馬が二人まづら事
難よ生血のあくまへ。備ハ盜賊ゑく人を殺害し我くぐ来る事を
つぞうす。歴めがけく。かくある事を
歴をおく燈と消へ影と照せりゆめきらんと推へる事く二人ハ

何所の人りゆのまきうざりへ相寄ふて。市がみるらん。と
祚うぬ身のあくざつき。まくひ煙草入へ。その以前よりそじて久
くまことねど塗樹う。お其の傍よお捨ちだしが。何人かこまくと盗み。
弥市どもをこゑては腰革入を落へもじく。我仕業そとせを
まくもふくわのきらん。我も実に見の敵を討者うりへ。天運を
ひけんは程武志の國萬能の辺ふく。年來昇ねし佐又めぐり合
首尾充敵を討えり。今本國信列へと駆る所もござり。敵を爲れ
身の正方と被り我身よつまた氣の毒もあるふ。まして一面敵を
猪屋の弥市とすく。子息とあまば外れらず。共よ敵をもろね及ぼ
うづら助太刀をもしてあらせんを。宿を拙者が心底こまく思推察

下さうべし。武士の身でござり敵をさがすハ百折む塵の艱苦を爲なば。
さうぬお況く町人の身で親の仇を報ひおんみく天晴の大丈
ま。瀧次郎強き感せり。何をう包みやびき拙者更に信州の小串
貞松の家臣唐琴浦ちうがす。同苗瀧次郎といふ者なり。かく年
名をあらすうへ。疑念をよからへて。とりども彼方へ油をま。
盜入されり。とゆる縛のぞく。りこくまびりくる。者敵。りゆく
證据あり。敵をすとりへ。敗戦の事が耳よして。こまごまと之證据
え。何条證据あると捨。證据うなづく。奈何小さひ男の相
手。人と殺しゆき方とも見へねど。孔子の陽虎よ似たう例へま
あま。相応の善惡ふもとく。是とても類み難く。と云ふ

ま。優曇花の身をもひする敵より。遂うがら。證据もあらず
般毛流やゆらん。立よらく。筋直あまとのつひき。させぬ。綱の身
ぐ。瀧次郎も餘方のく。斯く生で。翁を尽せども波入まうけ。ま
往來る。不便きらむおく。捨る。町人風情よ敵と。大至を
甚覚へ。かく。と。大刀抜そがれ。上廻ようまくつ。あら
切く。す。引發よ。と。まく。まく。腋刀を。わら。まく。生へ。志へ。たまく。
翁とりかく。切り入まう。まく。翁。もまく。の。太刀先と。六膳。と。孫
三郎が再び隼と。おおかのあゝと。うる。間よ。一箇の法席。喝く。そり
まく。瀧次郎を志へ。後入も。惣く。吾一言や。べき。まく。まく。
と。わら。翁。と。西箇ハ。躊躇うち。ふ被の法席ハ。近づく。まく。兩人。わら

わきとひくらる白刃の中へ。我身をかせよこゝへ入るに、巖次郎の腰く
彼の法師となりて何とやらんかと覺へあるやううふぞ。いと不審げよ
そぞ。吾らくわらうと改よ思ひゆぐ。折も何事の故ゆそ。
は争ひをさうかまひよやと向まく法師が双眼は泪を浮め君いが
覺へるがむか小学の店舗の佐倉の町ふと千本屋花房とまび
て連旅の泊業せりの三一年君我家より遣せむるひ娘が
雜役をまかひりつづる縁の端もともといたとまくの繋つて癡
のひとまぬうち同宿する通市どのがあ下の金子を持て留
の日と君が出来の日と同日つりしが入のす。通市どりが至夜
の明方駅たまきねゑあく何者とまどあと殺害もありのひ

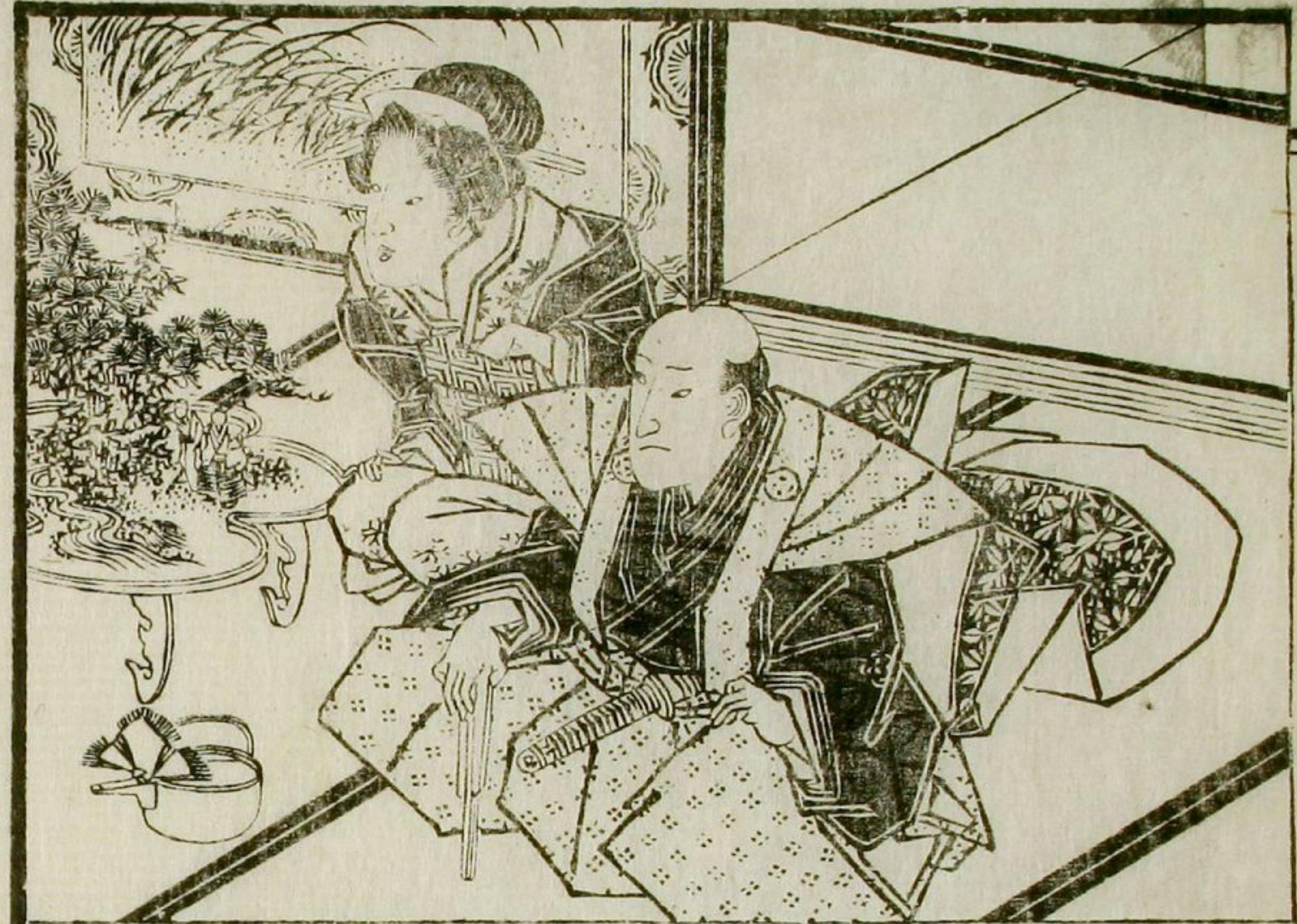
お義の傳不落て強てあきらめの四持御の腰まいと町人の柳の
腰根う常平住り國家をも妻へく猪つてまわぬといひ何故よ巖を
寄りうちよゑで窮へゆの様子も見ぬれぬ。お前先の人殺
まく盗賊をまかみゆくと愚令の後へすとまといひ又上別
筋市どりうちの方へまくのう妻へく猪と敵の證据と送つ
たる腰根を入をほつあひ狼狽花房の腰根へ操はたてぬき書
證をもくとて自嘆してをまぐると改く今更巖次郎が不便と
まくおもひをくもむ想は百千の心ひやこありまつて。船着
難す間どもらひその折までも運舟にて居て。重浦鬼平次ゆ
りのト巖者満一きゆとおひかへ引捕つて詮義をとらうした

迎はるりと腰へ大勢ふく。かくめ捕人とひそかくひきよ。
旅店の内をあくとみ見つかる。縣令の布告の颁布より
ほの二百両をこそ盜賊入殺す極つくりと縣令へ緒の旅店を
廻へてゆきをとひ。ヨリシテ。宿根を廢して何國へ逃へ。其處
まことよつて経義を主と更に移居へ。是より寵次
郎のあくへ立て主と緒の顛末書状もあらわ上刻す
縣市さぬの四子息跡三郎とぬとやらんの方へハ送りし。最難
國と云限の日本領も宣るるべと度一也。途次にて黙止
ち。察らる所今四方の双馬よりびひる。間違ひもとせひ
老翁を説ます。かやまのせう。小学の娘をまひ

て世小望みうけ。が生原のうす。剣舞して。あすねく諸国
靈場と頃深のまよ二ふ君よ達すのうせう。が娘が消き志の
不ども。ぬへあげと。さともがく雲水行脚の勇とく。甲
斐あり。今のうちに君よあひよせ。娘が様のおらまくを。
りか。あけ。君の内にうち只一返の四向が名傍糺織の経らるも
かふまく。の供養うらめびうとつげまのうとせ。娘も參めよ
あく。おと。郎どのふよ。以上ハ疑ひをとらへ。是う。鬼平次の面体陰ひ。そ
れとさへ。日本望をとげらば。その鬼平次の面体陰ひ。そ
がふが。然そと。もまく委く。もむへヤモビ。とゆく。弥三郎す
まく。疑会を散じ。さて。さやうにありける。幻ぬまとい。言ひ

最前の不穏のどんぐ。真平ひやくさるべくと波て瀧次郎も何が猪某へ不れをいこさす。皆亡父へ孝経のむりす所るが吾よもしても大脱せりと教が体よ弥三郎も済むものと再び修養法作みむひあく歎鬼平次とゆうんぐ人若骨柄ハ奈らやと同ふ修養景へく年頃ハ三十三四を白く眼中もすく身丈高く骨太く。ひつまよ一曲あらばう刃ある男うり隣りやもみとつけく捺さるべくとひよ弥三郎今上へ歎の面さてをあくらざりくど世よまだきく美か年とりひ這煙草入を證据せせあふ今又其へ歎うくノーテ外よ歎ありと吸と報するがす何といふ證据もさく何呼を當ふ何をほりよけ東川歎をさすがよ。

久や運捕くま申よ歎病死むるう又ハ公府の捕へらすと寛もあらば。何とせん懲りやとふ覚の涙みせび」と。修養法序瀧次郎も纏めうねる折柄又袖助ハ彼の旅日記を取り來りは体所みを見て何莫つやとおぎ逝よるふぞ。瀧次郎ハ五りへとてもを物語はば袖衣姿とさもくそまハ危き夏うりけりと。そのを寛を教ひける。修養法序の宿の妻の尼を残し。あたはまハ立前人となりよ。瀧次郎も敵を二重よまへとまハ道よ服取うてハ上のを。皇あり一刻も早く故国をかけまハ多情一けまど。弥三郎は別れと立上るよ弥三郎さす君みに運日暮れ歎をおふせ。故國みゆうとお義一けま。りつゝ我も度身のどく歎鬼平次と



からてが首提く故ら立候る日もあれば。ひづれりうよろこばへらんと。
口惜く涙よきつゝまは龍次郎。
強三郎をたげまさえとりゆゆう。
おもふけのうゑうやの。さうえんやま
元父兄の歎をお署すハ皇天の哀
あるのみ。諸天善神の守らせば。
何条主意をとげどりゆすと
や。山河くほくとも勇を大切よ
りち。カビロ
持ちとひと叮嚀す言ひさとし。
もらふがよき
必ず我國へおらきう尋ねまこと。
必ぞ我國へおらきう尋ねまこと。



妻しくかへり。生で娶よ居ゆり
とも名残ハ尽トと二人が三方(ニミ
コトモあく。ひのうちハいつちもん。
斯くは廻船房主婦の道也。
諸国の大鹽場をめぐりうる日本
下総へ立つて。つるの庵といふ。
爰よとみく娘のびとひとひら
ひーが八十金業の毒とくらむ。や
か度大往生をとげとくえ。

算拾八齣

得時梅残芳

且説唐琴う龜次郎へ曰くす本国へ着て直る處へ而目見ゆ。
首尾く兄の歎篤文天をおもひて指子を言ふよしとす四美達文天
が石情袖外が忠節梅の木のふれ候古鏡の威徳みどもちもよく
物語りと承次女院と鶴巣四郎の方を差上け玉が貞元公曰くうぶ
みのめうす。原末溝巣四郎ハ浦右衛へつはるふ又承次女院
よかる威徳あり。全く敵が孝ひ皇天のあとまみるひと篤文天
が病を治へた意をこげさせひよつと疑ひよけ玉が貞元
永く汝が家の宝くらむせひよつと外うけ物教えひりけ玉が貞元
次郎ハ家の面目あふ余り委うたうりくや。五前とまうでけり。
斯くて龜次郎目むけ兄の歎を紹へと彼女院の准集こゑ

寿をく朱り日毎ふ客の通間を。門前市をうへけることより龜
次郎ハ吉日を多くみを被ふ。袖外ハ下駄の奴金の忠節被羽の者
きよし。僕よ取立つて。厚くことを賞うける。さう頃よ龜次郎
は前の口覺へもでく。通商の頭をもせつけられば。一は年う
縁組せと。望むのまうけと。龜次郎ハちよ旨あきばとく。
心くひりけり。かうとけと。腰貞元公ハ西を走りし或時龜次
郎を通く。是れりつまで獨身ある。早く妻をむろびて。
後と修ましい不孝の不恵うと宣ふよ龜次郎曰ひ在の内役みひ
ぬ。松夏のとある。紫紫とりひじ花とひし操と三ねき能
をせし。ゆゑ難く妻をむろびと。と室へうへ親族の方

より養子うのとなりて一家と繼せらる。苗跡の経てりゆふもある
牛^{アシ}をうと障りうがんし存ひとや上るふど貞行公候へりこも如初
ふも詮^{サキ}き志探^{シラフ}く本妻ハとまくも妾とかへ忠信の種が
のとをばーじてき人を撰みあひしふ幸ひ貞行公の因^{モリ}意所^{シテ}は初か
時^{モリ}官^{アシ}せー自赤とよぐ^{アキナシ}女由緒^{ウイシキ}かくす^{シテ}容後^{ヨウゴ}とりひ
被^ヒと^シ延^シく^シの性^{シス}をすきも至^シく貞実^{シテ}氣^{シテ}覺^{シテ}る
因^{モリ}意所^{シテ}よくあひてちかく一けま^シが^シに^シ両方の因^{モリ}意所^{シテ}を被^ヒの日系^{ヒツキ}
と龍次郎^{ヤウジロ}が^シ參^シよ下^タのうつけま^シが^シ龍次郎^{ヤウジロ}も^シ羅^シき^シ一因^{モリ}
の^シ一早^ソ途^トびむ^シ。うらむ^シすく暮^シ一けま^シかくて工石の姿^{シテ}を
書^シ狀^{シテ}よ^シあ東^シう^シ四^シ源^シ義^シ方^シ告^シけま^シが^シ兩^シ角^シ

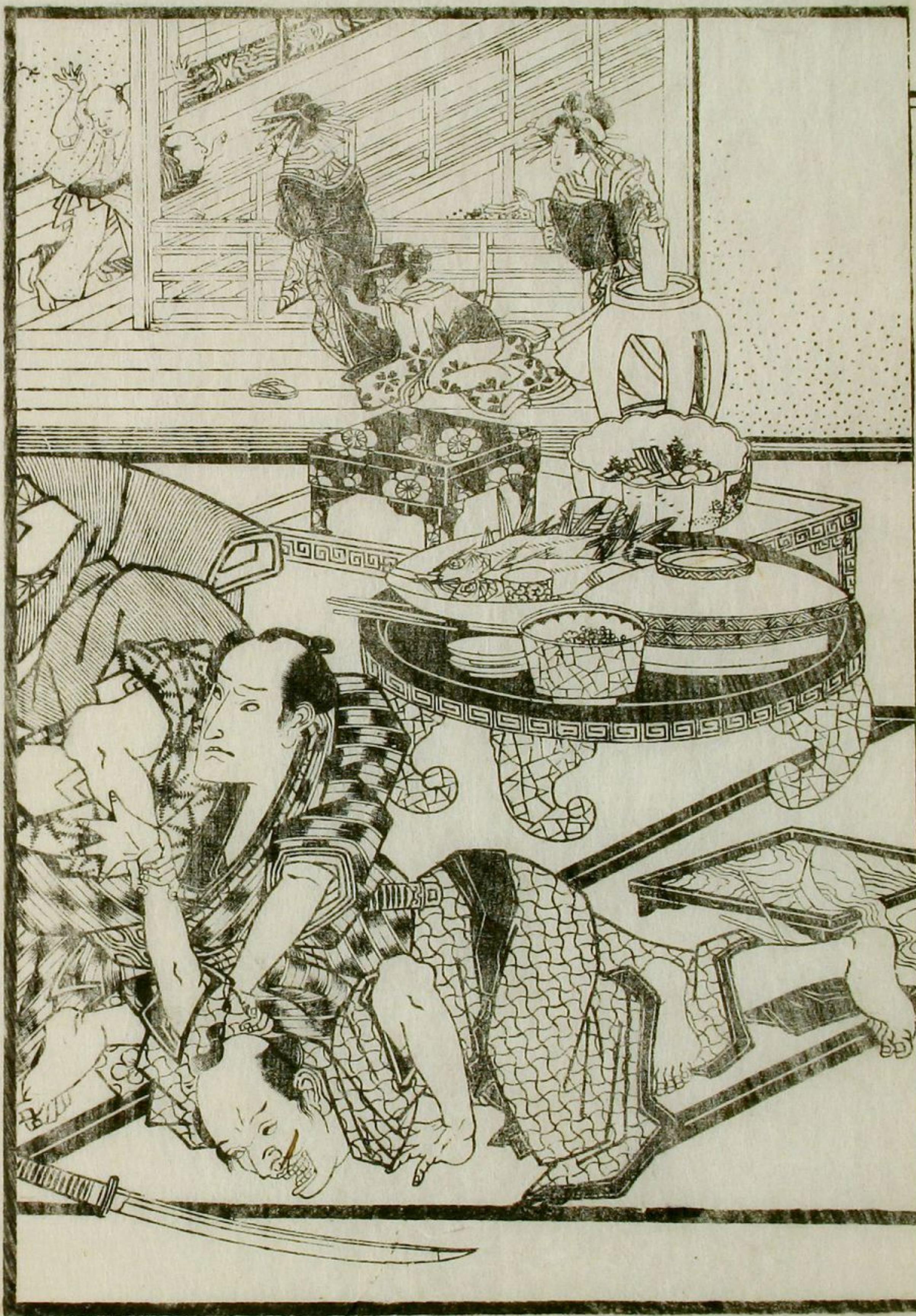
奈何とあひせよ。代^シ事便^シとゆく^シ新^シが^シよ^シりゆふ。初^モうを手^シ四
三^シ房^シの原^シ來^シのとく海^シ波^シと蘭^シ以^シ活業^シと。源^シ義^シ長^シも家業
二^シと^シ足^シことを^シて^シ情^シをつ^シみ信^シを以^シく交^シつけま^シが^シ源^シ義^シ小^シ源^シ義^シ
黨^シその德^シよ^シづ^シ。りを^シそ^シ不^シ孝^シの子^シう^シ不^シ孝^シの^シ本^シま^シ徑^シの^シ道^シ
縷^シ。老^シを教^シひ初^モとあ^シま^シみ其^シ風^シ大^シひよ化^シつけま^シが^シ懸^シ今^シ波^シを
天^シ晴^シの^シこと^シう^シと^シ。手^シ四^シ義^シも^シ梅^シを植^シべき地^シ所^シを^シ湯^シり^シ小^シ梅^シ源^シ義^シ
長^シ言^シあ^シま^シと^シよ^シをう^シび^シと^シ下^ターあ^シま^シ猶^シ手^シ四^シ義^シを^シ思^シい^シく
き^シ其^シ間^シもあ^シうと^シ梅^シと^シと^シ源^シ義^シ姫^シと^シ皆^シ
渠^シも^シ字^シと^シ所^シの字^シと^シて承^シく^シ其^シ忠^シ義^シ貞^シ節^シを^シと^シと^シ。^シ
あ^シた^シ作^シの手^シ四^シ義^シ生^シ姫^シが^シ氣^シ年^シの積^シ善^シの余^シ慶^シあ^シう^シれ^シて送^シが^シ

限り。今も葛飾は梅垣小梅源秀堀の名の残ることに因縁と
あらまけり。安下再生甚落上忍うる猪巻の跡ニ郎ハ仇鬼平次をねび
さんと。此程の越前三國うる敷賀姫とりて、彼の磨巻の所ゆる
家の奴隸よりうりあらむと。けくうらひける彼の磨巻の所ゆる
今へ便の先生ふるのうちへ來り同じく下男とろりと居て。斯く彼の養父太が部下うる火車衆平次、又は白井はいをうるをま
衣服大小三面ふる粉圓盃久馬と改名し、との敷賀姫へまう浦をと
りて傾城よしと。金狼をまたちへ運囲せしろ。人皆困夫尽と
りてをやし。さて巴日毎よ程山銀水網引廻の趣向も貞見て今
よみ古風よ百物語の怪物なる。と信とてよ幫間末社の量を
雷ハ

國へ。とく入奥あづけきらとよろじが新遣日友のかくすに
亥哉と。とてまくまくあり。去る程よき日暮よかびけしが彼の浦
糸がまきゆべ金鰐銀鰐査のう。許多の幫間歌妓居並び美酒
佳肴山海の珍味所せむすじ。またぐ馬ハ上手よや直り大至を
引く。身遣離妓よ歌をこなせ。寛くと立てく。体所る。ゆく。萬よ
ゆく。大江山の酒呑童子よ彷彿し。先ず一番よ當のへ。請問
三昧八ひと。曉ゆまく。かく。身遣つて扇を壁よか。あてて今ハ昔く。壁の
墨。何基筋とよぶる傾城姫よ。ほどうよど。似縫のあり。身遣
翁が新遣充が三昧八ひの物語り。始より終まで皆は冬一ふを
袖。立ちよく。お絶へば三昧八ひ隣を離き。りまく左をよもぐれど其

名所と白地よりてんへ導りあまべ皆がくらまゆ。折角仕合せ
の腰を折るもく張合はけふとりがえ馬のすまひ皆くもくの
間の笑をこらめ他言ひとりびづくも。ひらへと味ハ嚼むべて。じき
まく又さし吹きつ。猪もの傾城の亭にとりかへ世よ拂うる御見
舞。まほ佳のまが彼の傾城を責めたる。終よ責殺せ。出天西陽
月圓の形をあらすら。あらぬはせ。猪もと彼の御者
うり。ひよおとがまき。彼の答へとまくと。定め。一寝情よ
くま。宿居をもがしまき。彼の答へとまくと。定め。一寝情よ
まう。今日。明日。うとり。苦多。ま無れ。進止するふやあらん

ぢらと。何ひく用を。又二階へあぐらとまく。彼女。赤椅子
の中柱よ。隣をたまく居る。何と。と氣味。あくべ
傍を通。椅子を上と切り。頃不圖。うつす。彼女も嬉
うあむきた。頃をアハリ。目。鼻。うつぱら。う
かく。り。怪物。アハリ。客。ハコ。とり。と氣を失ひ。と語。を。
一度ハ頃。見合。あらしき。ぞ可笑。二番ハ歌妓峯。まく。先
口づら。漫結。ひと。ちと。口づら。次ハ。あ。者。牛。ハ。が。血。を。
の怪。経。こ。ま。す。昔。くら。聞。古。く。物。語。さ。あ。で。身。の。も。と。ご。う。や。ど。
ひ。うら。四番目ハ。四谷。難。経。あ。す。よ。う。す。九十九番。多く。小説
神。史。の。切。ね。き。だ。ま。く。の。生。を。ア。尼。ニ。ま。く。繕。く。修。く。百。番。目。ま。



番あき當あらわし。岡大戶おかだいの恩おん平次へいじが。今追隨おつづきの活は悉ごとく破はれへま
と。かうりふく。実じつはあることやら無なく。よし。こととりくる。登のぼる。据する。
自じら見みる所ところの怪あや徴ひ。あり。生なま陸りくを。やど。島しまろーきらと。おひしる。
よ。といふ。大勢おおぜい口くち同音どうおん。又大冬おおふゆが例たとの連延れんえんを。と。我われ々われここト
が。せ。あふ。と。岡おか。岡澤おかさわを。頬ほほ。もう。いふく。こまのまま。させ。母め
の。活はあ。す。四年よんねん以前まへの。と。う。一いち。我われ下し総そうの。依より僉くわう。死死び
と。り。も。年とし。旅たび。あ。い。ぶ。お宿しゆくせ。上じょう忍しのの。緒はじ商しょう人じん三百さん両りょうの。金かね
持も。國くにへ。飯めし。と。波なみ。不ふ因いん想ぞう。む。ち。未み夜よ派ばき。と。き。日ひ。よ
は。逃とれ。射さ。三さん百ひゃく両りょうを。奪だつひ。と。刀と食く。バば人の。主お居ゐ。休やす。休やす
血ぬけ。刀と提さげ。通とおさ。ア。キ。ハハ人じん。あ。で。石いしの。せ。矣え。時とき秋あき感かんれ。小

地藏じぞう。の。う。み。ら。す。ひ。り。人ひと。あ。活は。り。の。じ。エ。こ。り。す。よ。下し忍しの。羊ひつじや。山さん猿さるの
洞いわ。あり。て。已い。ハ。の。こ。ね。ど。我われ。り。ふ。と。宣の。ひ。一いち。巴ひ。胸むね。毛け姿しき。ぞ。つ。せ
志し。う。ど。も。全まつたく。心こころの。迷めい。ひ。み。ら。ん。と。毛け。修な。其その所ところ。を。き。ま。り。つ。今いま。と。諸よ
國くに。を。偏へん奪だつ。野の。よ。伏ふ。山さん。ふ。も。伏ふ。山さん。と。底そこ。と。も。も。鳥とり。と。も。鳥とり
ひ。と。裏うら。と。裏うら。と。鳥とり。と。鳥とり。と。鳥とり。と。鳥とり。と。鳥とり。と。鳥とり。と。鳥とり。と。鳥とり。
あ。い。ざ。く。と。活は。る。洞いわ。の。あ。い。續つづ。く。ざ。る。に。障さざ。子こ。と。さ。う。と。押お。觸ふ。き。一いち
の。社しゃ。役え。白しら。刃の。を。携な。へ。之の。馬ま。を。信しのぶ。と。白しら。眼まなこ。掠せがれ。も。我われ。を。維い。と。う。號號。の。今いま。汝な。物もの
活は。と。上方かみがたの。猪いのし。高たか人じん。縣けん市し。と。り。者もの。の。序じょ。よ。弥や。郎ろう。と。呼よ。く。の。ま。す。
汝な。と。私わたし。ひ。あ。い。ま。と。四よ年ねん。が。間ま。の。難なん愁しゆ。苦く。並な。大だい。て。の。古い。ま。と。と。
頬ほほ。も。紅べに。す。澄すみ。如ごと。死死。歌うた。と。有あ。れ。お。と。と。い。ふ。雲くも。と。つ。む。聲こゑ

高麗國へ念力岩と通じてやう。神仏へ祈りをうけ。食うべり根も
さう。尋ねたゞく思ひよ。向むかひの百物縁已が思ひよ。もののが
口うち自然のせいか。自業自得。汝はゆく汝はうち。圓滿國圓滿久
馬とハ役の名実。や。龜浦鬼平次とりへる者。うんり。どもみやうふ
猶有あまと。き。う。圓滿ハ胸にせし。う。どもひよ。ひつも。鑑
あきよ。我が。我こそ實の男鹿。よみ。く。誠。う。せ。少車の鬼軍
次とよび者。う。が。僻ト者。う。ふ。相違す。り。く。返付。う。一
金不ぞ。刀を乞ひま上に。大勢の船。泊ま社と。ド。かと。船。泊ま
ふ。き。ま。す。お給。おけ。バ。西人ハ度庭。あり。ま。一上一下。虚

実。火花をちらして戦ひ。が。弥三郎が孝ひ。もろ。刀先よ。さすがの
鬼平次。刀法乱。よう。めく所。と。み。う。け。斬伏せ。後。よ。と。ふ。を
さ。た。う。け。ら。時彼の佐助。弥三郎を。と。め。と。て。一刀の間に余
さ。く。う。び。一年未。足。せ。一。問。の。報。ひ。う。ぐ。き。よ。べ。く。爰。ま
唐琴龍。次郎。は。主用。あ。け。国。へ。ま。り。當。平。の。本。陣。よ。進。申。て。み。下。が。
教賀。宿。よ。宿。泊。あり。と。被。取。物。も。取。り。あ。ま。り。あ。き。く。え。ま。の。と。見。ふ。被
猪屋の。駿三郎。急。く。刀。覚。へ。あ。く。鬼平次と。鴻。が。げ。づ。戦。へ。あ
き。あ。と。大。を。よ。う。と。ひ。亭。と。と。び。て。一。五。一。十。を。物。縁。せ。ら。あ。あ。う。
助。太。方。せ。て。と。あ。ひ。へ。う。ち。に。何。う。く。鬼平次。と。お。あ。う。と。け。ま。で。龜。郎。
通。く。う。弥。三。郎。ど。の。本。廻。と。達。せ。て。ま。さ。と。欲。ひ。う。つ。て。こ。年。主

ゆひへう唐琴。龍次郎さうとりふふぞ。跡三郎ハこまを見えゝあは
まし。礼とく。云々のうを語るふ。龍次郎も且感じ且歎ひ呼の旅令
へ子細を言上す。まゆゑのくあさまりけ。バ。龍次郎ハ跡三郎を誇り
本国へ飯り小串どくへ右の娘ホセヤ上け。バ殿ハほゞめぐらしき
ふ思へ石しゆ。忠臣ハ孝子の門よみがりとりよ一箇ろくす一箇二
かくる孝子の我邑よ集くハ予う幸ひうそて跡三郎をもむくへ武
士よぬ取立厚く扶持へひけ。六跡三郎も龍次郎と只すのぞく
日毎よ其安否を尋ねとひく。眸く交うける折も終海禅師當國
斗轂の序。龍次郎を訪ひ。ひけ。バ。龍次郎ハ大よ秋び殿へ頬ひ善哉
所普門院ゆく。終海禅師を拜仰とて七日七夜の大旅餓鬼をす

藤の死様をす。尼浦を廻る。藤蓑す。又紫あがれ跡市あが眞福を
りのりけよ。七日満月。もと夜の暮よとさらの人々の立つて限をとらじ。後
羅道の苦銀をのび。成公を免うす。とひしと。永平より西のま
飛去こと。ト。猪川五ヶ町を五法の徳よと怨え。成公をせ。あふ
いと詮づかき。ひく。跡忠勤とおげみけ。白糸と。支障の中よ
數多の子ども。豈まく。目出度まのみ。おほきけ。ふぞ早速書翰よ
そのあはま。其由を東。あはま。手四事房。あが方へ。ち。せけ。バ。と。も。然。が。う。限。う。
折く消息よ。その安否をとひ。睦く。交り。家富榮。何へり。う。ぬ
男と。うつ。金く忠孝の餘慶。うつ。

梅花春水卷之四尾

作者 南仙笑楚滿人編

画工 柳川重山圖繪

○松浦佐用媛後編 全五卷 近日出板

○美艶仙女香 包四十八文
諸葛新刊
坂本氏

文政九年

丙戌正月

江戸

馬喰町二丁目

西村屋與八

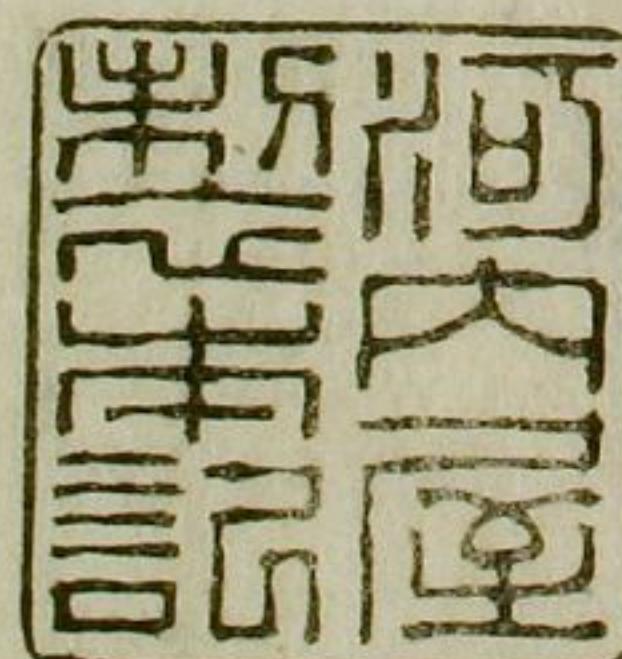
小傳馬町二丁目

丁子屋平兵衛

横山町二丁目

大坂屋半藏板

群玉堂藏版



大阪心齋橋通博勞町四丁目七番地

岡田茂兵衛

